

4. 「大学院生による教育評価アンケート」全学的観点から見た現状と今後の課題

全学（大学院）のアンケート結果から、選択式設問においては、「学位取得のための道筋が明確に示されている」が全体平均点 4.4 と最も高く、次いで「オフィスアワー等、大学院生活を送る上で、教員に相談できる制度が整っている」が 4.3、「提示されたカリキュラムは納得のいくものである」、「提供される科目の授業内容が明確に示されている」および「研究を進めていく上で、必要な指導教員が適切に配置されている」がいずれも 4.2 であり、研究科や専攻別で見ると若干の評価の高低はみられたものの概ね本学のカリキュラムや教員の指導体制に納得していることが示された。このことから大学院生本人が自身の学位取得までのプロセスを具体的に思い描けている様子が伺える。一方、「自習室、研究設備等、学内の学習環境は十分に整備されている」は全体平均点が 4.1、「研究科（専攻）、あるいは大学に、研究を進めていく上で、必要な図書、関連資料が用意されている」は 3.8 であったが、これらの項目は専攻による評価の差が大きく、研究内容の違いを考慮しても満足度に差があることが明らかとなった。また、「キャリア形成に関して、適切な指導、相談が行われている」については、例年評価が低いことが問題視されているが、本年度も全体平均点が 3.6 であり、全項目中でもっとも低値となった。

自由記述では、どの専攻の学生からも「よかった点」として、教員から熱心で手厚い指導を受けることができたこと、担当教員だけでなく他分野の教員からも指導を受ける機会があったことなどが挙げられており、選択式設問の結果と同様、少人数制の利点を十分に享受できる指導体制であったことが示された。しかしながら「改善すべき点」として、教員が忙しく指導時間を十分に確保してもらえなかった、あるいは一部の教員の授業が満足のものではなかったという、教員の仕事配分に関する構造的な問題や、教員個人の資質に係わる指摘があり、全体的には高評価を得た指導体制ではあるが個別に解決すべき課題も明らかとなった。さらに多くの意見が集中したのは統計解析ソフトの使用環境に関する不満であった。加えて、選択式設問の結果でもっとも全体平均点が低値であった「キャリア形成」に関する率直な不安も吐露されていた。

これらの結果をふまえて、今後の課題を整理すると大きく以下の 2 点に要約できる。

ひとつは、「キャリア形成を視野に入れた指導を具現化する」ことである。学位取得までの道筋は学生に十分理解され、そこに至るまでの指導にも総じてみれば高い満足度を得ているといえるが、修士号を得た先のライフコースを描ききれない学生に対しては、さらなる指導が必要となる。本学にはロールモデルとなり得る教職員の存在などキャリア教育の資源が豊富にあることから、キャリア形成に関する学生の不安を解消するための有効な方策を講じることは可能であると考えられる。

ふたつめは「学習環境の改善を早急に実現する」ことである。特に具体的な指摘を受けた点については、対策の早期実行が望まれる。

本学の大学院教育の一層の充実を図るためには、学生からの意見を真摯に受け止め、今回顕在化した課題に対して、まずはそれぞれの専攻内で専攻ごとの特徴に合致した改善策を議論し、さらに学生一人一人に向き合った指導をより円滑に行えるように全学的な視点で協力体制を構築していくことが求められているといえよう。

文責：藤原 智子（現代人間学部福祉生活デザイン学科 FD 委員）